

平成 27 年 5 月 27 日現在

機関番号：32675

研究種目：基盤研究(A)

研究期間：2011～2014

課題番号：23246108

研究課題名(和文) アジアの都市住宅の類型に関する史的研究

研究課題名(英文) Historical Study on Typology of Asian Urban Houses

研究代表者

高村 雅彦 (TAKAMURA, Masahiko)

法政大学・デザイン工学部・教授

研究者番号：80343614

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 26,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は東・東南アジアの沿海部を対象として、それぞれの地域に特徴的な都市住宅の形成過程を空間論および社会論的に認識・把握しながら、都市史をベースにした新たな建築史研究のための方法論を拡大・精緻化することが目的である。

伝統的な都市住宅の形成過程とその諸類型の考察、都市住宅の近代化過程に見る空間的および社会的特性の把握、アジアに共有可能な都市住宅に関わる共通言語の発掘と方法論の創出を研究の成果として獲得することができた。住宅を都市構成の基本単位として捉える方法を取りながら、この時代のアジアの都市住宅を取り巻く全貌を実証的に明らかにした。

研究成果の概要(英文)：The areas to be studied are eastern and southeastern Asian coastal areas; we will explore formation processes of characteristic urban houses in each region from the spatial and social points of view, develop and refine methodology of new architectural history based on urban history, and extract issues and points to be discussed for regeneration and creation of historical houses in modern cities.

We were able to clarify 1: Formation processes and types of traditional urban houses, 2: Spatial and social characteristics of urban houses in the process of modernization, 3: Terminology and methodology for Asian urban houses. We could conduct empirical analysis on circumstances around Asian urban houses based on the concept of houses as a fundamental unit of urban structure.

研究分野：建築史・都市史

キーワード：アジア 都市住宅 類型 建築史 都市史 国際情報交換

1. 研究開始当初の背景

近年のいわゆる都市再生ブームにあっては、そもそも歴史的な都市と建築の再生であるがための<歴史>そのものの位置づけがなされていない。とくに、アジアの沿海部の都市の多くは、1990年代前半からの急激な経済成長によって、爆発的な人口増加と都市開発を経験し、歴史を生かした都市再生、とくに専用住宅から町家、長屋に至るまでの住宅の継承をいかに実現するかが緊急の課題となっていた。高村が代表の平成19~22年度基盤研究(B)「アジアの都市再生に関わる歴史のおよび方法論的研究」を通じて、アジアにおける21世紀前半の都市再生とは、いわば都市住宅の再生そのものであって、そのためには精緻な都市史・建築史的分析が不可欠であるとの結論を得た。しかしながら、都市住宅の論考は相当数あっても、歴史的に掘り下げたものはほとんど見られず、研究の方法論や視点、精度にばらつきが大きい。また、従来この地域の伝統的な都市住宅は、北京を頂点とする中華文化圏の中で捉えられるのが一般的であったが、そうしたある一地域からの視座ではなく、フラットな立場で相互を比較することがまったく行われてこなかった問題もある。加えて、国内外を問わず、これまで都市住宅は文物的な単体の建築として扱われてきたが、その性質上、都市の基本単位として位置付け、道・水路から街区、敷地割、敷地の規模と形状に至る一連のつながりのなかで捉えなければ、その本質を明確にしたことにはならない。これらが本研究の着想に至った経緯であり、問題の所在であった。

本研究の参加者は、いずれも1980年代からアジアの都市史・建築史研究を精力的に推し進め、従来の文献史学だけでなく、個々の都市に潜む個別のアイデンティティや主体性を求め、その土地固有の具体的・実体的空間を描き出そうとしてきた。それがアジアの多様な地域で同時進行的に行われたことの意義は大きく、これらボーリング調査的な個別の時代を縦軸とすれば、いま空間的・時間的にフラットな環境の中で協同研究を行う、あるいは共通する視点に立って相互を取り結ぶ横軸の時代に入ったといえる。

本研究は、この機を逃すことなく、まず1980年代から現在までに蓄積されたアジアの都市住宅に関する個々の成果を再考し、次に別々の研究を同じフラットな枠組みのなかでクロスさせながら、近現代の分断によって見えにくくなった地域相互の空間的つながりを再構築し、地域と地域のネットワークの上に成立する多様な住宅の新たな歴史像を創出しようとするものである。そこでは、空間的な問題だけでなく、時間的な相関関係のなかでもとらえる必要がある。このことは、前近代と近代のつながり、あるいは断絶をそれぞれの地域内で問うことと不可分な関係にあることをも意味する。

こうして、学術的な観点からアジアの都市

住宅を総合的に明らかにし、都市再生のための基盤を歴史的な視点に立って見出すことこそ、今後の都市のあり方を構想しようとするのだという立場を表明しようとしたものである。

2. 研究の目的

都市と建築の歴史をアジアという空間の中で地域を超えて紡ぎ、その全体を体系立てながら、歴史と文化の時代を切り開く、真の都市再生のための基盤を作りだすことが研究の全体構想である。アジアの都市再生が注目されるいま、都市住宅の価値づけこそが21世紀前半の主題となっている。

そこで、本研究では東・東南アジアの沿海部を対象として、それぞれの地域に特徴的な都市住宅の形成過程を空間論および社会論的に認識・把握しながら、都市史をベースにした新たな建築史研究のための方法論を一段と拡大・精緻化し、現代都市における歴史的住宅の再生と創造に向けての諸課題や論点を抽出することが目的であった。ここでいう都市住宅は専用住宅のみならず、都市に特徴的な店を併用する、いわゆる町屋も含まれ、むしろ高密度に集住することが求められる都心では後者のほうが主体となっている。こうして、住宅を都市構成の基本単位として捉える方法をとりながら、この時代のアジアの都市住宅を取り巻く全貌を実証的に明らかにすることが大きな目標となった。

3. 研究の方法

以上のような問題意識を持って、本研究は研究期間内に三つの共通テーマ、1. 伝統的な都市住宅の形成過程とその諸類型、2. 都市住宅の近代化過程に見る空間的および社会的特性、3. アジアに共有可能な都市住宅に関わる共通言語の発掘と方法論の創出について、主に東アジア華東の上海、華南のマカオと雷州、対岸の台湾中部の集落群と沖縄北中城村、東南アジアのホーチミンとヤンゴン、そして大阪の各都市に限定して明らかにし、その比較都市住宅論を総合的に把握・追究する方法をとった。

それぞれのテーマについて具体的に説明する。

(1) 伝統的な都市住宅の形成過程とその諸類型

研究対象となる都市は、伝統都市が現代都市へと至る過渡期を近代都市と位置づけることで、それぞれ大別される。一般に、中華文化圏として共通項の分析に陥りがちであるが、それぞれの都市ではその土地固有の伝統住宅が形成されているという立場をとった。したがって、四合院、三合院、兩班の邸宅、連棟、長屋、高床、浮家、房廊、市塵・行廊、筒屋などが具体的な対象となった。研究代表者の高村が編著者となり、研究分担者の大田省一、青井哲人、木下光、恩田重直が

共同執筆者となって刊行した特集「アジアの都市住宅」(『アジア遊学 No. 80』勉誠出版、2005年)は、それまでの個々の研究を羅列的にまとめたに過ぎないが、この点を再確認するのに大いに役立つものである。

(2) 都市住宅の近代化過程に見る空間的および社会的特性

近代住宅といえども、その地域に存在した伝統住宅の特徴を受け継ぎ成立することのほうがむしろ自然で、一概に時代の精神がそのまま住宅類型となって具現化されるとするには捉えきれない面が多い。このことはテーマ1であげた文献「アジアの都市住宅」でも確認されつつある。そこで、テーマ2では、従来の素朴な形態論や空間論に加えて、都市住宅に関わる官民の社会・文化的諸相などが、実際の空間とどのように結びついて形成され、典型的特徴を帯びるようになったのかを明らかにするものであった。また、アジア近代に特有の市街地の拡大による集合住宅の開発手法のあり方、景観整備や防火対策、衛生改善と不良住宅への対処の詳細を解明する。具体的には、里弄、韓屋、総舗、長屋、バンガロー・ベランダハウス、街路型衛生集合住宅、ショップハウス、騎楼などがその対象となった。

(3) アジアに共有可能な都市住宅に関わる共通言語の発掘と方法論の創出

ここでは、テーマ1および2で得られた都市住宅の研究成果をもとに、これまでの一国建築史では自明とされてきた都市住宅の類型を再編成し、相互の関係を具体的に解明するとともに、その研究のための方法論や視点を明確化して、アジアの都市住宅を取り巻く全貌を実証的に明らかにする方法をとった。このテーマ3では、これまで別々に把握され、同時に比較できないとされてきたアジアの多様な都市住宅に対し、同じフラットな環境の中で語るための共通言語を生み出すことが重要課題となった。研究代表者の高村雅彦と研究分担者の大田省一、青井哲人がパネラーとなった『東アジアから日本の都市住宅(町家)を捉える』(2007年度日本建築学会大会(九州)建築歴史・意匠部門パネルディスカッション)では、このテーマに沿った明確な言語の提示と方法論の創出が不可欠かつ急務であることを参加者全員で強く自覚するに至った。

4. 研究成果

本研究は、東アジア・東南アジア沿海部の都市住宅を対象とし、伝統社会におけるその形成過程ならびに近代化過程に見る空間的および社会的特性の解明の二つを大きな研究の枠組みとしながら、都市史をベースにした新たな建築史研究のための創造を基軸に据え、その内容と諸類型について実証的に検討し叙述することが4年間にわたる共通課

題であった。最終的に、アジアに共有可能な都市住宅に関わる共通言語の発掘と研究方法論の創出が目標であり、現地に精通した各研究者の調査研究が、4年間にわたる計画の主たる活動であって、都市住宅を都市の基本単位として捉える初期方法論の共通認識のもとに進めた。

テーマ1においては、アジアに形成された多様な都市住宅の類型の抽出・整理を行った。当初の想定通りにそれらの分布や形成過程を考察したが、とくに重要と結論付けたのは同じ類型に属する都市住宅であっても、都市や地域によって、その空間構成やデザインにその土地特有の歴史的背景が影響し、少しずつ違いを生みだしながら成立した点を明らかにした。

それを受けて、テーマ2のそうした典型的特徴がいかなる開発手法、景観整備や防火対策、衛生改善と不良住宅への対処のもとに成立したのかを明らかにすることを試みた。

上記二つのテーマから導き出された結果は、とりわけアジアの都市住宅のあり方が同じ場所であっても時間的経緯にとまって変容するという点、一方で地域を超えて同時代的に同様の変化が見られるという、研究遂行のための共通基盤を見出すことに成功し、この視点にたった地域間の比較研究に重点を置いた。だが、ここでは現地調査によって実証的に都市住宅の変容を明らかにすることが主となることから、単なる歴史的な建築物やすでに失われた建築類型の解明を目的とするのではなく、変容過程の把握が可能な都市・地域を取り上げることが求められたため、必然的に研究する時代の対象は19世紀から20世紀の、いわゆる近代に注目することとなった。

同時に、各住宅群の分析には、土地所有や開発の手法を解き明かしながら、とりわけ街区や道路、敷地割に見られる都市組織の特質、関係性の解明が欠かせないことを発見した。

以上のように、都市住宅の変容過程を現地調査から具体的に明らかにするには、敷地の状態や所有者の変化などとクロスさせながら、常に動的に対象をとらえることが最重要であることを見出し、これをテーマ3の共通言語の発掘と方法論の主体として考察を進めることになった。こうして、都市史をベースにした新たな建築史研究につなげることができると考えた。

具体的に研究の対象となった都市は、高村雅彦による上海、ホーチミン、マカオ、大阪、青井哲人による台湾中部の濁水溪に立地する集落群、大田省一によるヤンゴン、木下光による沖縄北中城村、恩田重直による雷州の各住宅である。

主に、上海の研究成果について、以下に示しておく。

(1) 19世紀上海の里弄建築の成立過程とその変容

19世紀中期に形成された上海の一街区を対象に、土地所有、開発手法、道路拡張、建築計画、建築類型とその用途を分析し、街区内部の空間構造がどのように築かれてきたのかを明らかにすることを目的とした。とくに、里弄と呼ばれる路地に面した棟割建築を都市の一要素として捉え、多様な里弄が街区のなかにいかにして組み込まれ全体を成り立たせているのか、社会構造との結びつきにも視野を広げて考察した。

この研究では近年新たに公開された上海市档案馆所蔵の一次資料で、1867年から1933年の地籍資料である上海公共租界工部局編「Shanghai land assessment schedule」ならびに同年代の同じ上海公共租界工部局編「道路拡張計画資料」、さらに上海福利営業股份有限公司編印『上海市行号路図録』（別名『商用地図』、1939年・1940年に出版、1947年・1949年再編出版）をもとに研究を行っている点に特徴がある。これらの資料は、当時の土地所有、開発手法などの状況を詳細に知り得る貴重な史料であるが、これらを使用した研究が十分に行われているとは言えない。

この研究を通じて、方形の街区の四周に店舗を配し、内部を棟割の建築群で構成する、近代アジアの都市、たとえばホーチミン、マカオ、大阪に共通した都市開発、都市運営の手法を明らかにすることが大きな目標となった。

この研究により、具体的な対象となった新建小区と呼称される里弄には、様々な用途の建築がまるで一つの都市のように集合し、その多くが里弄建築によって形成されていることを明らかにした。その里弄もまた、用途に応じて空間を変えつつ、多様なタイプが存在し、とくに里弄が住宅以外の建築類型としても使われたことは注目すべきである。つまり、近代上海にとって、里弄は都市を急速に開発し運営するための万能の器として形成されたといえる。

より具体的には、1849年から1866年までのあいだに、街区内の敷地割りはほぼ確定し、その後は若干の敷地の統合と分割があるものの、ほぼ各敷地内で建て替えを行いつつながら、

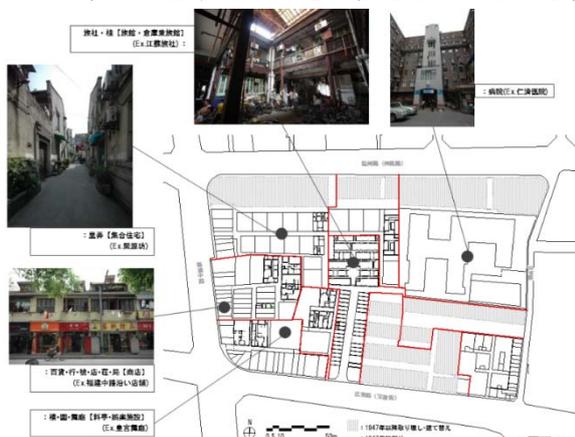


図1 調査研究の対象の一つ新建小区



1890-1892	~1897	1899
Lot No. (1864-66)	Lot No. (Renter)	Lot No. (Renter)
425 293	Jardine Matheson & Co	425 425A Morrison, G.J. & Gration, F.M.
426 294	Jardine Matheson & Co	426 426A Dowdall, Hanson, and McNeil
427 295	Jardine Matheson & Co	427 427 Sassoon, M.E.
428 292	Sassoon, M.E.	428 428 Evans, Mrs. Mary Annie.
429 290 291	Evans, Mrs. Mary Annie.	429 429 London Mission Society
430 298	London Mission Society	430 430 Chinese Hospital Trustees
431 298	Chinese Hospital Trustees	431 431 Dowdall, C. and Hanson, J.C.
432 297 299	Jardine Matheson & Co	432 432 Watts, Mrs. Cumme, J.P. and Cooper, J.
433 295	Cumme, C. and Maitland, John	433 433 Hill, Geo. B.
434 296	Hill, Geo. B.	434 434 Cushny, Alexander
435 300	Cushny, Alexander	435 435 Barton, (Dr.) Alfred
436 301	Barton, Alfred	436 436 Barton, Dr. Alfred

図2・表1 1890年の敷地割りと土地所有者

1947年の高密度で機能が複合した街区を形成したことを明らかにした。その間、土地所有者は常にイギリス人を中心とした租界の外国人ディベロッパー、後に建築家らであった。1900年ころには、すでに中国人が外国人から土地を借りて建築にあたるのが普通に行われている。

外国人によって開拓された街区は、中国人の手によって生み出された里弄という新しい開発手法を用いて初期の成立を遂げた。そして、初期開発においては、敷地ごとの個別開発に留まっていた里弄であったが、1947年までの間に敷地境界線を越えて路地を共有する柔軟な再開発が行われるようになる。それにより、里弄自体の構成も変化し、より効率的な開発を目指して再開発が行われている。その転換期となったのが、1869年の第三次土地章程による中庭を持つ二層の木骨レンガ壁造への建て替えと、1923年の共同租界工部局房屋建築規則による路地幅や窓、中庭、天井高、さらには構法に至る厳格な規則の徹底であった。したがって、この新建小区の里弄もまた、この二つの規則直後に建てられたものが大部分を占める。

そして最後に、1866年から1917年の第一期計画によって街並みを一から作り上げるチャンスを得た中国人は、里弄という建築タイプによって、美しい街並みを整備していく。しかし、中国人による上海都市建設という目的のもと行われた1925年から1936年の第二期計画によって、彼らが築き上げたはずのその街並みは失われていくのである。このように、道路拡張計画は、街区構造、街並みに大きく関連するものであり、この計画を契機として、上海の景観は大きく変化してきたことを明らかにした。

上海では、続いて1920年代に開発が始まった里弄を研究の対象とし、同じ里弄建築で

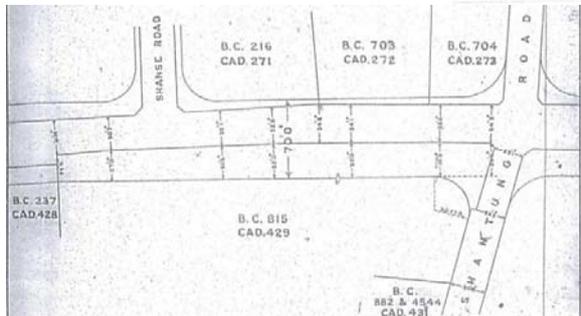
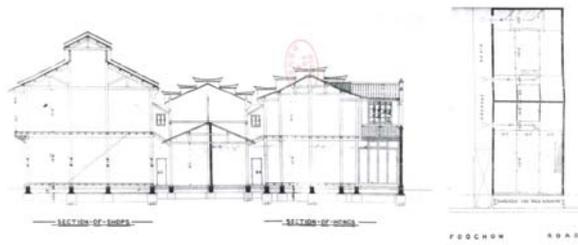


図3・4 1900年代の道路拡張計画と里弄計画

あっても時代や都市組織が異なることによって、その空間構成が変容し、とりわけ敷地割に見る開発手法や土地所有の形態の違いが大きく影響するという結果を得た。

(2) 成果の公表

本研究の成果は、学会等の発表のほかに、まとめとしてシンポジウム「アジアの都市住宅から何が見えるか」(2015年3月2日、湯宿一番地カンファレンスルーム)を開催し、一応の結論を見た。ここでは、青井哲人が「台湾都市史の再構築を考えると、町屋はどう見えてくるか」また高村雅彦が「アジアの都市住宅をとらえなおし、互いにつむいで、新たな枠組みを創出する」というテーマで研究発表を行い、日本の都市住宅研究を勢力的に進める大場修氏にコメントをお願いし、大いに意義のある成果公表の機会を得た。

また、2015年末に向けて、現在以下の報告書を本研究の成果として刊行準備中であり、広く本研究の成果を公表していく。

- ・「上海近代都市住宅の生成と変容」
- ・「大阪近代長屋住宅の成立過程」
- ・「ベトナム・ホーチミンの都市と住宅」
- ・「マカオの都市住宅」

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計27件)

- ① 寺田千尋・木下光、敷地囲いの変遷を通してみる沖縄県北中城村大城地区の住民主体の景観形成評価に関する研究、日本建築学会計画系論文集80、査読有、2015、pp. 369-378
- ② 恩田重直、広東省・雷州内城における住宅の空間構成について、民俗建築、143号、査読無、2013、pp. 38-43
- ③ 高村雅彦・江農・大熊優里香・寺田佳織、上海における近代街区の形成過程と建築

類型 その1. 福州路・新建小区の建築類型(1842-1949)、日本建築学会大会梗概集(東海)、査読無、2012、pp. 927-928

〔学会発表〕(計15件)

- ① 青井哲人・神崎竜之介・平場晶子・吉永ほのみ・祐川牧子・小見山滉平・弓削多宏貴・陳穎禎・白佐立・吉田郁子、台湾濁水溪河系における都市形成の特質と沙仔崙の変容その1 19世紀末・20世紀初の沙仔崙 漳州系同姓集落としての社会・空間的特質、日本建築学会大会(東海大学湘南キャンパス・神奈川県平塚市)、2015.9.4
- ② 大田省一、ヤンゴンのローハウスについて ヤンゴン近代建築悉皆調査報告、日本建築学会大会集(東海大学湘南キャンパス・神奈川県平塚市)、2015.9.4
- ③ 高村雅彦、建築史からみた『清明上河図』、北京故宮博物院200選開催記念国際シンポジウム『清明上河図』の魅力に迫る一東アジア文化史のなかの『清明上河図』(招待講演)、東京国立博物館(東京都台東区)、2012.1.7

〔図書〕(計9件)

- ① 陣内秀信・高村雅彦編、水都学Ⅲアジアの水辺、法政大学出版局、2014、266
- ② 高村雅彦「上海の里弄一方街区の内部世界に迫る」、『路地研究—もうひとつの都市の広場』、鹿島出版会、2013、pp. 93-116

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

○取得状況(計0件)

〔その他〕

ホームページ <http://uha.ws.hosei.ac.jp/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

高村 雅彦 (TAKAMURA, Masahiko)
法政大学・デザイン工学部・教授
研究者番号：80343614

(2) 研究分担者

青井 哲人 (AOI, Akihito)
明治大学・理工学部・准教授
研究者番号：20278857

大田 省一 (OTA, Shoichi)
京都市芸繊維大学・工芸科学研究科・准教授
研究者番号：60343117

恩田 重直 (ONDA, Shigenao)
法政大学・エコ地域デザイン研究所・研究員

研究者番号：80511295

木下 光 (KINOSHITA, Hikaru)
関西大学・環境都市工学部・准教授
研究者番号：90288796